

ぱしふいっくびーなす号上の 「アジア日食学校」



辻 徹

〈山形城北高等学校 〒990-0824 山形市肴町 1-13〉

e-mail: t-galaxy@msj.biglobe.ne.jp

国際天文年にあたる 2009 年、7 月 22 日に日本国内で観測できる皆既日食に、アジアの 4 地域から 8 名の若者（15～19 歳）が招待された。日本を含むアジアの五つの地域の若者たちが、4 泊 5 日という日食観測クルージングの中で、具体的にどんな活動をしてどのような成果生んだか？「アジア日食学校」という特別クラスの担任のような役割を担った立場から報告したい。

私は運よく NHK プロモーションがチャーターした日食観測船ぱしふいっくびーなす号に乗ることができた。その際日江井榮二郎先生から、次のような話があったのは 6 月の下旬のことだった。

「今年は国際天文年に当たり、これまでお互いに協力し合って、またお世話になってきたアジアの天文学仲間に推薦をお願いして、各地域から若者を今回の日食観測に参加させたい。今のところインド、韓国、台湾、中国から各 2 名」とのことだった。先生の話から、これらアジアの若者の日本滞在中のことや航海中のプログラム、観測へのアプローチ、そして発表といった一連の面倒を誰かに見てもらいたいとお考えのようだった。

「まずは船上に「アジア日食学校（仮称）」というクラスを編成したらどうですか？ 時間割を決め、勉強しながら 7 月 22 日の皆既日食を皆で一緒に体験しましょう」このような内容の返事を日江井先生にしたのがきっかけで、山形の高校教師が、ここで報告するようなミッションの担任教師のような役割を担ってしまったのである。

アジアの各地域から若者が集まるので、絶好の国際理解・国際協力の機会である。是非とも日本からの参加者も欲しい。そんな企画も、乗船の日が近づくにつれてしだいに形になってきた。互い

に面識もなくメールだけのお付き合いながらも、東京には同じように担任で協力してくださるといふ小菅 京先生（東工大附属高校の先生）や計画をまとめるために島田さんらがフォローをしてくださっていた。乗船までに準備が間に合うのだろうかという不安の中で、7 月 19 日（出港前日）横浜でお互い「はじめまして」とあいさつしながら 4 泊 5 日の「アジア日食学校」がスタートしたのである。

招待されたのは中国、台湾、韓国、インドのアジア 4 地域から各 2 名の合計 8 名（15～19 歳、男子 5 名、女子 3 名、メンバー表参照）。これらの学生を招待するに当たっては日江井榮二郎代表が具体的な動きを担いつつも、この企画には小尾信彌、村山定男、高柳雄一、的川泰宣、桜井 隆、渡部潤一（敬称略）など、若者を支援しようという天文学や宇宙科学の先生方のほか、和田昭允先生の協力があったという。

「アジア日食学校」に集まったアジア 5 地域 11 名の若者たち

ここでぱしふいっくびーなす号の「アジア日食学校」に集まった若者たちを、道中の呼称で紹介しよう（メンバー表参照）。

表1 「アジア日食学校」メンバー表

	Name (Age)	Nationality	
1	Mr. Rajan Rajive (17)	India	Christ Junior College, Christ University, Bangalore
2	Ms. Prabhu Apoorva (18)	India	Bangalore University
3	Mr. Heo Seung (14)	Korea	Daedeok Middle School
4	Mr. Park Jin Woo (17)	Korea	Jung-il High School
5	Mr. Huang Yu-Hsiang (17)	Taiwan	National Taichung First Senior High School
6	Ms. Lo Yin-Yin (16)	Taiwan	National ChangHua Girls' Senior High School
7	Ms. Zhu Ju (15)	China	No. 57 Middle School in Beijing
8	Mr. Leung Ka-Heng (19)	China	Shau Kei Wan Government Secondary School
9	Mr. Miyasaka Chihiro (16)	Japan	長野県立松本深志高等学校
10	Mr. Iizuka Yuya (18)	Japan	成蹊大学理工学部 エレクトロメカニクス学科
11	Mr. Hibino Masatoshi (21)	Japan	日本大学生物資源科学部 生物環境工学科 4年

インドから参加の2名は **Rajiv** (男17歳) と **Apoorva** (女18歳)。インド中央部のバンガロールという標高2,000 mほどの高原にある天体物理学研究所の所員の子たちで、二人は互いに顔見知りだった。韓国から参加の2名は **Park Jin Woo** (男17歳) と **Seung** (男14歳)。二人ともソウルから南に2時間くらいの大田市在住。後で知ったことだが、**Park Jin Woo** の父親は天文学者で、この日食を観測するために上海(当日は曇って観測できなかった)に行ったという。台湾の二人はどちらも台中市在住の **Yu-Hsiang** (男17歳) と **Yin-Yin** (女16歳)。台湾ではインターネットで公募して50名くらいの応募者の中から選抜されたと聞いた。**Yu-Hsiang** は、望遠鏡やカメラなど本格的な観測器材を持ち込んだ。中国の二人は、香港から参加の **Henry (Leung Ka-Heng)** (男19歳) と北京から参加の **Remy (Zhu Ju)** (女15歳)。中国の二人はこの日食学校が初対面だった。唯一最初から参加した日本人は **Miyasaka** (宮坂知宏)。長野県の高校2年生の男性。彼の祖父母が乗船していたが、こうした特別クラスが編成されることを説明会で知り参加したという。

いずれも日食初体験という9名は、5階のキャ

ビン3室に3名ずつ分かれて4泊5日の間寝食を共にすることになったのである。この9名には、皆既日食を見る機会を得たことを心から喜んでいふことと、これから大学に行って自分が学びたい専門分野を決めようとしている若者である、という二つの共通点があったと感じる。9名の中ではきっての論客だった **Rajiv** と **Yin-Yin** は、天文学や宇宙科学に興味をもちつつも、生命科学に進もうと考えているようだった。**Henry** も生命科学の方向に進むことが決まっていたと言っていた。

乗客の中の日本人の若者にもこの日食学校への参加の呼びかけがなされ、大学1年生の **Iizuka Yuya** (飯塚祐陽) と大学4年生の **Hibino Masatoshi** (日比野正季) が参加した。こうして「アジア日食学校」は11名でスタートした。

講義あり実験教室あり、科学への興味を深める欲張りな4泊5日のプログラム

4泊5日のプログラムをどう作るかが乗船前の課題だった。天文学・宇宙科学や分子生物学の先生方が一般日食観測者の顧問格で乗船しているクルーズなので、講義や授業の時間を取るのは難しくないという。一般乗客向けのプログラムとすり

表2 「アジア日食学校」の4泊5日のスケジュール（乗船前に作られた予定表）

	7月20日	7月21日	7月22日	7月23日	7月24日
7:00	7月19日の夕方に成田空港着。	朝食 7:30-8:30	朝食 7:30-8:30	朝食 7:30-8:30	朝食 7:30-8:00
8:00		朝礼 8:30-8:45	朝礼 8:30-8:45	朝礼 8:30-8:45	朝礼 8:30-8:45
9:00	↓ 横浜港近くに宿泊。ミーティング、三溪園見学。	準備と作業の時間	皆既日食観測 9:30-13:00	共振振り子の実験教室 橋本静代先生 9:45-11:30	下船 9:00
10:00		皆既日食観測リハーサル 10:30-11:45			↓
11:00					
12:00					
13:00		冥王星の研究について 13:45-14:30 渡辺潤一先生	スケッチ・ポスター制作の時間	作文の時間 13:45-14:30	
14:00	乗船	ブリッジ見学 14:30-15:30			東京工業大学附属科学技術高等学校の生徒と国際交流
15:00		彗星の研究について 15:30-16:15 的川泰宣先生	日食総括 15:00-16:00	お茶会 14:30-15:30 五味先生	
16:00			スケッチ・ポスター制作の時間		↓
17:00	夕食 17:30-19:00	夕食 17:30-19:00	夕食 17:30-19:00	夕食 17:30-19:00	
18:00			ポスター制作の時間		↓
19:00	開校式 (19:30-20:00)	星空散歩 19:15-	NHK 日食特番中継 19:30-20:45		
20:00	日本の文化について Mr. R. BALDWIN	終礼 20:30		閉校式 20:30-21:00	7月25日にそれぞれ帰国する。
21:00	今回の日食について 日江井榮二郎先生	コンサート 21:15-22:15	撮影発表会 21:15-22:15	交歓会 21:15-22:15	
22:00	終礼 21:30		終礼 22:15-22:30		

* 乗船中の「アジア日食学校」の学生たちの時間割の概略。網掛け部が学生たちだけのために用意されたプログラム二重線で囲った三つのプログラムの中で、学生たちは一般乗客に向けて発表の機会が与えられた。

合わせをしつつ、開校式に始まり、Mr. R. Baldwinの日本文化に関する授業や渡辺潤一先生や的川泰宣先生の講義、橋本静代先生の実験教室、船内の茶室を使った五味岑子さんによる茶道教室などが次々にスケジュールの中に組み入れられていく様子がメールで送られてきた。日食観察ばかりか、科学や日本文化に興味をもたせるための欲張りなプログラムである。

6階の中会議室が日食学校で使えるようになったというメールが7月15日にあった。ようやくホームルーム(HR)が決まったということは、日ごろ高校で働いている者にとってこの「アジア日食学校」の形が見えてきたときでもあった。朝礼をHRで行い、その日の予定や連絡事項を伝達。講義や授業はこのHRで受けることにし、終礼をHRで行い明日の予定や連絡事項を伝達して解

散。こうした1日の流れがようやく見えてきたのである。出発まであと使える時間は4日。

いちばん気になっていたのは、「皆既日食に向けて、彼らにどんな取り組みをさせるか？」だった。日食観測初体験の私にとって、これがいちばんの難題でもあった。担任を任される者として、学生たちに一つの方向性を示しておかなければ、クラスとしての満足感がなくなるのではという心配があった。最初に相談を受けたとき、文化の違ういろいろな地域から若者が集まるのなら、あらかじめ彼らに宿題を出して、その答えを持ち寄せたらどうだろうと提案し、宿題の素案も作ったのだったが、時間的にその考えは実行できなかった。さて、クラスを一つにする道具立てを何にしようか？

体験発表のためのポスターを作ろう。 最終日に体験したことを作文に書こう

何といっても皆既日食をクラスのみinnで体験するのである。この最大関心事に向けて、最初から何らかの仕掛けをしておかなければ……、気持は焦る。この仕掛けが成功するかしないかで、きっと学生たちの満足感ばかりか、私のようにスタッフとしてかわる者や彼らを招待した人たち、彼らを送り出してくれた国の推薦者や心配しながら待っている学生たちの家族ら皆がハッピーになれるかどうかがかかっている。乗船の日（7月20日）の夕食後、開校式が予定されていた。開校式そのものはセレモニーだが、4泊5日の間にクラスとして全員でやっていく課題について担任が話すのは、このタイミングしかない。出発前メール上で合意していた課題は二つ。

- ① 一般乗客向けのプログラムの中で「日食総括」とか「撮影発表会」という催しが計画されているので、アジア日食学校として発表できるようにポスターやコロナのスケッチを作る。（準備：大判の模造紙にカード式のシール、カラーマーカー、黒画用紙、色画用紙、

色鉛筆など）

- ② 「2009年7月22日の皆既日食で私が体験したこと」というタイトルで、皆に母国語で作文を書かせる。（準備：原稿用紙）

こうして準備できた出発前の最終プログラムは、表2のようなものであった。

予定どおり7月20日乗船して、夕食後の19:30からHR（ホームルーム室）で前述の先生方を迎え開校式が行われた。セレモニーの後、学生たちと私たちスタッフが残る、これからの4泊5日をどのように過ごしていくかについてガイダンスを行った。スケッチのこと、ポスターのこと、発表のこと、そして最終日の作文のことをあらかじめ話し、作文については一人につき5枚の原稿用紙を渡し、「作文はコピーを2部作成し、原本はあなたとあなたの帰りを期待して待っている家族へのレポートとして、1部はあなたをこのミッションに招待したスポンサーへのレポートとして、最後の一つはあなたをこのミッションに推薦してくれた各地域の推薦者へのレポートにする」と、書かせる意味を与えておいた。

こうして、後にRajivが、「このミッションには私たちを忙しくする担当者がついていた」と言ったように、スタッフは彼らをかなり過密な4泊5日のプログラムへと追い始めたのである。

いよいよ日食だ。スケッチを残そう。 日食の過程をピンホール像として残そう。 ポスターには五つのアイテムを盛り込もう

日食は10時過ぎに始まり11時25分過ぎから6分30秒ほどの皆既、日食終了は13時ちょっと前。皆既日食中の6分30秒余は、各自の行動に任せることにしても、約3時間を超える長丁場の天体現象である。7月21日（前日）の午前中は、決められた観測スペースでのリハーサルの時間が準備されていた。「アジア日食学校」のメンバーに指定された観測スペースは、スポーツデッキ。あいにくの荒天でデッキ上のスペース割をしていた



テープが吹き飛ばされるような強風が吹き荒れ、明日もシートやいろいろな準備品が風に飛ばされないような対策を講じることを教訓として、早々に HR に退散、明日の本番観測の準備時間にすることにした。

[準備すること]

- ① コロナスケッチ用の八つ切りの黒画用紙（中央に 3 cm の円を書いておき、当日色鉛筆でコロナの輝きをスケッチとして残す）
- ② 部分日食の像をピンホール映像に残そう。（用意してきた厚紙に、日付・時刻をピンホールで描く）。それぞれの時刻のピンホール像の担当者を決め、皆でピンホール像をデジカメで撮影（写真参照）。
- ③ ポスター用に五つの観点を提示 皆既日食の印象を次の五つの観点で、母国語でカード

化する。そのカードをもとに後で発表用のポスター制作をする。（写真参照）

1. Impression
 2. Color of Corona
 3. Color of Sky
 4. Stars
 5. Change in the Atmosphere
- Optional: Legend in your Country

7月22日、日食当日。船中2泊後の3日の朝、ようやく皆既日食観測ポイントの硫黄島沖の海域に出て初めて太陽が顔を出した。550名ほどの乗客ばかりか、ぱしふいっくびいなす号全体が喜んだ。昨夜は伊東昌市先生の英語での星空解説を聞きながらゆっくり外の散歩を楽しむ予定だった。しかし曇天のためそれがかなわず HR での話と



「アジア日食学校」, 当日の第一課題は, ピンホール映像を残そう.

10:00, 10:30, 11:00, 12:00, 12:30, 13:00の部分日食のピンホール映像を残すため, 厚紙に「2009 22 July」の冠とそれぞれの時刻をピンホールで用意した. 彼らの服装は, 日焼け防止の意味で, 長袖・帽子着用とした. それぞれの時刻に担当者を決めてデジカメで記録することにした. でも記録は12:00までしか残らなかった. 皆既が終わった後, 的川先生と記念写真(写真下)では皆満足の表情である.



なったが, Rajiv と Yin-Yin が宇宙論のさまざまな話題を質問. 伊東先生もだんだん熱を帯びて, HR は議論沸騰. 予定時間を過ぎてもなかなか終わらなかった. 天体クルージングでありながら, HR での講義が多くなかなか外に出られない二日間だった.

北硫黄島の島影を間近にしたときには, 日食が始まる時間が迫っていた. HR では飯塚礼子さんが日食観測のための最終チェック, 小菅先生が学生たちの服装チェック. 不合格者は, 部屋に戻り観測準備, 暑さ対策, 日焼け対策を万全にして, 9時半に指定された観測ポイントに.

当初は暑さ対策のために10階のデッキと6階のHRを行き来しながら, 10:00, 10:30, 11:00, 11:30, 12:00, 12:30, 13:00のピンホール像の撮影をしようと, 役割分担も決めていたのだが, 9時30分にデッキに出て, 皆既日食が終わり太陽

もだいぶ戻った12時過ぎまで, 誰一人6FのHRに戻る人はいなかった. 日食が始まってからは, 皆無我夢中だった.

しかし, この3時間余りの濃密な体験がすべてであり, 部分日食が経過する過程は順番を決めてピンホール像を作り皆で撮影し, 皆既が近づくにつれて細い三日月形になる太陽像で描かれる時刻のピンホール像を見ては, 皆既の瞬間を待ったのである. カウントダウンが始まり第二接触のダイヤモンドリングが輝くと誰彼となく大歓声を上げ, 一瞬真っ暗になり薄いコロナが黒い太陽の周りに薄らと姿を見せた. 皆既中は静か.

日食が始まる前, デッキ上に置いた温度計は52℃を示していたが, 食分が50%を超えるころから温度は下がり始め, 周囲からは「気持ちいい」という声が聞かれるようになり, 11時11分に私は長袖の上着を脱ぎ, 11時13分の温度は40℃, 11時



18分で38℃、温度の低下は急激だった。11時20分金星が見えるとの声、金星を確認。海の色が異様に濃いブルーだと教えられ感動。皆既7分前の11時18分には、私が持ち込んだUVセンサー（簡易型でUVAとUVBを検出）の数値が0になった。皆既中に温度計は32℃を示した。実に20℃の低下である。私たちが太陽によって生かされているという感覚はこうしたものなのだろうか。

11時25分19秒に始まって11時31分57秒に終わった皆既日食の前後約10分間を、学生たちはどう過ごしたのだろうか。それをレポートするほど、この時間帯の彼らの動きを観察している余裕は私にはなかった。しかし、あらかじめ5項目の観測テーマを設定したポスターやスケッチ、そして最終課題の作文に必ずや現れてくるに違いない。

もうだいぶ明るくなってきた12時00分近く。

私たちアジア日食学校のメンバーは、ほぼ日食を堪能した気分だった。ちょうど近くにいらっしやっ的川先生を囲んで記念写真。それぞれの学生たちの笑顔が、満足の何よりの証拠のような気がする。

学生たちのコラボが始まった。 スケッチ、カード作り、ポスター制作へ

昼食をとった後は、15:00~16:00の日食総括プログラムでの発表、21:15~22:15の撮影発表会でのポスター発表に向けた準備が進められた。スケッチにしてもポスターにしても、制作時間に余裕があったわけではない。彼らは時間をうまく使いながら、それぞれがコロナのスケッチ（当初はデッキでスケッチする予定だったが、結果的に記憶や記録をもとにしたコロナのスケッチになった）



日食の感動を発表しよう。第二の課題は、「見たこと・感じたこと」をスケッチやポスターに表現すること。あくまでも発表できるようなものを作るというのが目標になった。ポスターに書く五つの観点は、ミーティングで皆で出し合って作るようになっていた。時間とともに各自の役割ができて（左ページ写真）、白い模造紙がある方向性を持ったメディア（左写真）に変身していった。閉校式の記念写真には船長にも入っていた（写真上）。

を完成させ、ポスター制作に必要な五つのカード作成、そしてポスター制作をこなしていった。

主に日食総括の前の14:00~15:00の時間帯、日食総括会終了から夕食までの16:00~17:30の時間帯が、彼らの表現制作に当てられた時間だった。最初は組織だった動きがなかったが、次第に役割分担ができ、仕事の指示が飛ぶようになる。ポスター制作の中心になったのは Apoorva。彼女は、全体の構成を大まかに決めるや、次々にメンバーに次の作業の指示を出し、白紙だった大判の模造紙が、みるみるある方向性をもった媒体へと変化していった。空白ができると、誰彼となく日食に関する自分の印象や体験を図案化したり、文字を足したりしていく。食事の時間は約1時間30分と決められているのに、コラボレーションが盛り上がり、なかなか食事に行こうとし

ない。

夕食時には、学生たちのコロナのスケッチがメインダイニング前の広場にすでに展示されていた。食事が終わると学生たちはHRに直行。ポスター作りが続いた。

さまざまな印象や記述。

ポスターはそれだけで見る人を引きつける

カードで集められたコメントには、文字だけでなくイラストなども書き込まれている。感動的な体験を自由に母国語で表現していいとしていた。以下、小菅先生と通訳の役を果たしてくれた野村和子さんの評価から、どんな内容のポスターだったかを紹介しよう。写真を合わせて見て欲しい。

学生たちの感想は、まずは『Impression』の項に見られる。「“Beyond description”（言葉では言い



Photo by 黄鈺翔
2009.07.22 on Pacific Venus



Photo by 黄鈺翔
2009.07.22 on Pacific Venus

2009年7月22日の皆既日食でのダイヤモンド・リングとコロナ. Mr. Huang Yu-Hsiang 黄鈺翔 (Taiwan National Taichung First Senior High School の学生)が, ばしふいっく・びいなす号甲板から撮影.

表せないほどの素晴らしさ) (Park Jin Woo), 「空は言葉で言い表せない美しさだった」 (Leung Ka-Heng) など, 表現を超える印象をもったことが語られていたが, 「月と太陽が織りなす偶然性にただただ驚嘆させられた. うまく言葉で言い表せない」 (Miyasaka) が, 皆の気持ちをよく代表している.

その他の各項目では, 学生全員しっかりと皆既日食を観察した様子が見て取れる. 興味深かったのは『Color of corona』であった. コロナの色を白ととらえたものが多かったのだが, 「黒い太陽の周りに赤くなっているところもあった」 (Hibino) のような正確な観察結果を示したもののほか, さまざまな表現を駆使して印象を表現している. 「天使のような白. ダイヤモンドのような輝き」 (Rajan Rajiv), 「黄金かオレンジ色かと思ったら白かった. 信じられない. 本に載っていた写真と全く同じだ」 (Lo Yin-Yin), 「少し紫がかった白だった」 (Heo Seung). ほかに, 「船の上からは写真があまり撮れなかった〜(>_<)」 (Iizuka) といった, 観測の奮闘の様子を伝えるもの, あるいは, 自国に伝わる日食についての言い伝え「古代中国では日食は黒い犬が太陽を食べることによって起こると信じられていた」 (Zhu Ju) を紹介する

ものや, 自身を表すマスコットキャラクターのイラストで食の進行に従って涼くなった空気の変化を表現したもの (Huang Yu-Hsiang) があった.

長くも短くも感じられる皆既中の時間, 学生それぞれが観察眼を駆使した様子を伝える臨場感あふれるポスターである. 一方で「一人一人がどんな観測をしたのだろうか?」という期待感を十二分に満たす力強い仕上がりのポスターでもある. 担任としては思った以上の仕上がりででき栄えである. 感動的な体験を共有した若者たちは, 何もしなくてもこうした結果をもたらすものだと改めて感じさせられた.

このポスターは, 前述したようにその日の21時15分からの撮影発表会というプログラムの中で, 担任の私が11名の学生たちのコラボレーションの結果として発表し, HRの部屋の前に翌日まで掲示された.

作文の時間. やっぱり書かせてよかった.
なかにはなかなか立派なものがある

スケッチの作成とポスター制作で自分たちの日食観測の結果をさらけ出した彼らにとって, 7月23日の午後13時45分~14時30分に用意された「作文」の時間は, さほど苦労しない時間であるよ

うに感じていた。微妙な表現も使えるように初めから母国語でという条件にしていた。しかし、説明に「レポート」という言葉を使ったためか、Apoorva は自身が教えられた科学レポートのスタイルにこだわった。Yu-Hsiang と Remy はなかなか書き出せずにいた。結局彼らは次の日の朝にこの宿題を提出した。

彼らは内容的にも素晴らしいレポート(作文)を残してくれた。きっとこのレポートは、当初の思惑通りに彼らの家族や彼らを招待したスポンサー、そして彼らを推薦してくれた各地域の専門家たちに、大きな満足をもたらしてくれるものだろう。彼ら一人一人がこの「アジア日食学校」に参加して得た多くのことが表現されているのである。別な機会にこのレポートの中身の紹介したいものである。

さて、「アジア日食学校」の活動報告も、最後のレポートを書き終えて、担任がそれを集め終わったところでそろそろ終わりに近づいた。7月22日の20時30分から行われた閉校式では、日江井先生から特製の修了証が一人一人に渡された。皆既日食観測を可能にしてくれたキャプテン(船長)も来賓として参加してくださった。日江井先生は講評の中で、やおらポケットから割り箸を1本出した。そして、間もなく3本の割り箸も出して、「1本の割り箸は簡単に折れるが、3本になると簡単には折れない。皆のコラボレーションは素晴らしい成果を見せてくれた」との意味の話をされた。担任としても、まったく同感であり、きっと彼らを傍らから見ていた誰もが感じたことだったと思う。

最後に、彼ら学生たちがクラスという狭い範囲の交流ばかりでなく、囲碁を乗船客と打つなど、乗客の多くの日本の方たちと交流をもったことも書き残しておかなければならない。彼らは、皆既日食を体験したということばかりではなく、多くの大人たちと交流し、多くの方から協力を得た。最初に日本文化の講義をしてくださった Mr. R.

Baldwin, 天文学のそれぞれの分野で講義をしてくださった渡辺潤一先生、的川泰宣先生、伊東昌一先生、興味深い物理現象としての「共振振り子」の実験を遊びや工作実験という形でわかりやすく教えてくださった橋本静代先生、世界一の竹トンボを紹介してくださった清水 浩さん、そして茶道の指導をしてくださった五味岑子さん、その他 HR に足を運んでくださった多くの方との交流も彼らの日食観測の体験そのものであったと思う。

謝 辞

私が本稿を書くに当たって、次の方々のご協力に負うところが多い。ここで感謝します。このミッションを私同様担任として支えてくれた小菅京先生、通訳ばかりか学生のお母さん代わりも務めてくださった野村和子さん、そして「アジア日食学校」を手伝ってくださった飯塚礼子さん、日比野由美さん、全体的な計画の立案から準備まで事務的な作業を一手にお引き受けいただいた島田 薫・香弥子さんご夫妻、そして何より私にこうした機会を与えてくださった日江井榮二郎先生に感謝します。

Class of Asian students for Total Solar Eclipse Observation on the Ship “Pacific Venus”

Toru TSUJI

Yamagata Johoku High School, 1-13 Sakana-cho, Yamagata 990-0824, Japan

Abstract: Eight students from 15 to 19 years old from four different Asian countries were invited to the observation cruise of the Total Solar Eclipse in Japan on July 22, 2009, in the international year of astronomy. As one of their class teachers, I would like to report on their work in the “Asian Total Solar Eclipse Observation Class.”